

犯罪が増えています。印象で書くショートにしてしまふう、点と点が反応しあうとか思えないような犯罪ですね。そういう傾向が顕著だったのですが、地下鉄サリン事件に集大成したといふ気がします。

橋爪 オウムもそうですが、さまたま同時に犯罪の底流を流れるのは「現実感が希薄である」といふことだと思います。資本主義社会が成熟し尽くして高度消費社会を迎えた。その特徴として、マニユアル化とメディアの発達があります。

ある教団の信者で、たゞ三人の男女、一組は夫婦ですが、三人で一緒に飛び出し、自分たちで新しい宗教を作らうとしたわけです。そういうするうち、女性の夫にあたる人に悪魔がついていると言つて、女性とリーダー格の男が夫を殺してしまつ。死後も悪魔払いと称して死体を解体し、塩水で洗い、骨にまでしてしまつ。殺すことにによって初めて善悪二つが対

メディアはもは現実を反映するものではなくて、受け手の欲望を反映するものになりました。非常に細分化されているし、受け手に奉仕するようになっています。メディアの個室の中では、自分を守ることができ、現実を拒むことができる。本来十代のころに乗り越えられるはずの精神状況が、かな

現実感はますます希薄になつて
います。主体性を回復しように
も、それはいかない。すべてがあ
たかも決められたように日々動いて
いきます。そんな現実を承認して
いくべきでない。自分がそこにあること
を認めたくない。そのため現実が
なおさら希薄に見えてきます。
犯罪というものは、希薄な現実
の中に現実感を取り戻す方法かも
知れない。それを自己目的として
活動すれば、病理的ではあります
が。

力団に借金があったというが、お金を取るという行為と四人を殺すことが、どう結びついているかよく分かりません。

かつては、具体的な関係性の中から動機が発生して殺人が起きてしまうといふことが、僕らが事件を取り材していく最低限、ひとつの方としてありました。でも、そこから完全にははれてしまった形で、暴力が発動されるタイプの犯罪が増えています。

朝倉 地下鉄サリン事件を聞いて、最初にふと思つたのは、ここ数年、若い人の犯罪の中に、ある顕著な傾向、一言で言えば、殺意が発生するとは思えない状況の中で残酷な殺人が起きているということなんですね。

自動機が見えないが、結果として出た様相が残虐であるような。たとえば千葉県市川市の一家四人殺しです。十九歳の少年が部屋に忍び込み、四人を次々と殺した。暴

肥大化するといふことは、ヒトが希薄になり現実感を喪失するということなんですね。さらに九〇年代につけ加わったことに、冷戦の解体があります。世界を支えていた方向感覚、歴史感覚が消失しました。世界を秩序づけていた核戦争の重荷が取れ、民族紛争が勃発するなど、混亂が生じています。知識の枠組みが崩れ、サブカルチャーと高級カルチャーの区別もなくなりました。

間が生まれるという構図なんですよ。犯罪は生きてきたことの巣き当たり、最後の決算として、これまたあたわれますが、この場合、犯罪を通過することによって恵みがいて善があり、対話が成立っています。こういうように、犯罪を通過することによって初めてリアルな関係が営める空気が生まれるという例が、八〇年代以降、随所に見られました。

朝倉 前世とかカルマとかで自己解決する人が多いでしょう。今、自分はこうだけど、本来の自分は違うというやうな。それも一つの自己防衛なんかだと思いますね。オウムの場合で言うと、超能力も自己防衛のモチーフですね。時代的にはオウムという組織は、バブル経済がおかしくなった時期に急成長した。そのへんとも照應

は望ましくないのですが、事件の大きさからみれば、そうしないわけにもいきません。

もうひとつ情報源はオウム教団の広報ですが、これは宣伝に等しい。情報をきちんと編集し、真実に迫るものとして提供することに、ほとんどどのメディアは失敗したんじゃないでしょうか。テレビなどは労せずして、視聴率が取れると飛びついた。

朝倉 いろんなメディアが団子状態というか、同じような送り方

第一は、国内外の何らかの団体からオウムに資金が流れていた場合で、これは「陰謀」があったことになります。でも、それではないだろうと私は見ます。第二は、集めた資金を逆に他に流している場合です。例えば、ロシア進出を仲介してもらうために、有力者に金を渡した可能性ですが、これは「陰謀」と言えません。第三は、覚せい剤の暴力団への横流しがいったケースですが、やはり「陰謀」と呼ぶに値しないでしょう。

ゆがんだ鏡 対談編

オウム真理教と犯罪 下

社会学者・東工大教授

橋爪大三郎氏

評論家

胡倉 喬司氏

脱冷戦で方向感消失

組織された 超能力願望

現実感はますます希薄になっていきます。主体性を回復しようとしないで、そうはいかない。すべてがあらゆる意味で現実感を失ったかも決められたように日々動いています。そんな現実を承認しないで、自分がそこにいることを認めたくない。そのため現実がおさら希薄に見えてしまいます。犯罪といふものは、希薄な現実の中に現実感を取り戻す方法かも知れない。それを自己目的として

するようになりました。

橋爪　いまの若い人は、現実に敗北し尽している。しかも、そのあり方が特殊です。昔の人々も決して現実を喜んで受け入れたわけではなくて、いやいや巻き込まれ苦勞しながら人生を送っていたのですが、現在は豊かになつてますから、現実に拒否され、リテイーが感じられなくても自分を守る方法があるのです。

——メディアの対応については。

橋爪　今回は、眞実を伝えるというメディアの使命を果たすことが難しい事件でした。どういう事実があつたのかを確かめる方法が、メディアに与えられませんでした。だから、ひとつは捜査サイトからの非公式情報に頼る。本来

社会学者 橋 脱冷

「個室」作り 現実を遮断

――「陰謀説」が言われたくなり、ついでに「闇(やみ)」がある、という声もありますが。欄干三つの可能性に分けて考えてみたいと思います。

るべきでしよう。この間、これまで破防法に反対してきた宗教学者が突然、オウムに内乱罪を適用せよ、とか言っているのを聞いてびっくりしましたが、そんな臭い物にふたをしてごみ捨て場に放りこむようなやうな方では、何かを解決しないことなんかできません。

たとか、教祖によきわいくないと
がこんなにある、といふりーク
が行われ、マスメディアはほとと
どその言いなりに報道してしまっ
た。いわば国家意志との二一三回

セレーノの簡単な絵柄でそれを表現する。その報道は読者の無意識に強力な作用を及ぼすと思いました。

橋爪 今回の事件を、当局は「國家への挑戦」みたいに感じました。

い」の救われているだけでし
朝倉 三月の地下鉄サリン事件
直後の報道で気付いたことでし
が、多くの記事に「新聞紙に包ま
れたサリン」といった表現があ
ました。しかし、サリンを新聞紙
に包めるはずはない。捜査の都合
などによって、こうした表現にな
った事情も含めて書かないとい
う讀者は分からません。新聞紙に
包むことは決してないのです。

橋爪 捜査情報をうのみにしちゃ
ために、誤報を生んだ松本サリン。
事件の時と、何も変わっていません
よ。今日はどこまでも「眞犯人」

第一は、国内外の何らかの団体からオウムに資金が流れている場合で、これは「陰謀」があったことになります。でも、そればかりでなくと私は見ます。第二は、集めた資金を逆に他に流している場合です。例えば、ロシア進出を仲介してもらうために、有力者に金を渡した可能性ですが、これは「陰謀」と言えません。第三は、覚せい剤の暴力団への横流しが、またケースですが、やはり「陰謀」と呼ぶに値しないでしょ。こうした枝葉は、事件の本質と関係ありません。「ロッキード事件の闇」とは違って、今回ほんのことは明らかに出来るでしょうし、明らかにされねばなりません。その意味で今後の報道には頑

宗教法人となつてわざが六年足らずで一万人の国内信者を獲得し、海外にまで活動拠点を広げていたオウム真理教。信者の中には、まじめで優秀な若者も数多く加わっていた。「ハルマゲドン（人類最終戦争）」を唱える（終末の教団）が、九〇年代の日本社会で急成長を遂げた理由は、何だったのか。オウム問題に关心の深い社会学者、精神医学者、作家の三人に「オウムを生んだ時代」について、語り合つてもらひた。

福島　成長の原因は宗教や教義の魅力よりも、むしろ信者を獲得する手段ではなかつたか。いわばキヤツチセールスのよのうで、初めはヨガや超能力など若い世代が魅力を感じうなことを目の前に提示して誘い、だんだんと宗教に取り込んでいった。また、肉体の修行から入り、身体的な快感や変容を通じ精神的に変わっていくなど、「体へのこだわり」も若者にアピールしたのではないか。現代の若者はナルシシズム的な傾向が

らし企業・官庁へと成り立つが、魅力的にならなくなっている。私はこの七〇年代から八〇年代にかけての日本の思想状況が「継続性」のパワーワークのようになると見えた。オウム真理教の大好きな特色はチャベット密教やリスト教の概念、ユダヤ陰謀説、対米批判など、あらゆるもののパッチャワークだが、それは日本の思想状況の戯画的な生き写し。現場や歴史を見ると自分が欠けていく。この二三十年の日本社会が生み出した

——オウム真理教の急成長の理由をどう考えるか。
吉岡　これまで日本の学歴社会が消費社会を支えてきた価値観が求心力を失つ中、若者たちは「このままではどうか」という共通の意識がある。事件のさなかに信者が「何となく分かる」「自分はオウムに近い」と言う人が多かった。信者が増えた土壌は、広くこの社会にあったと思つ。まじめな若い信者たちに、麻原代表は「自己を越える」とか「世界をどう理解するのか」ということを、彼らなりに理解できる道筋で説明した。本来なら、教育や教養が説明すべきものだが、戦争責任の問題をないがしろにしてきた戦後日本には、本格的の思想は育っていない。いわば、その代役を麻原代表としてきた。

——鬼つ子的な存在が信者たちに対して務めたのと世界との関係を解き明かす

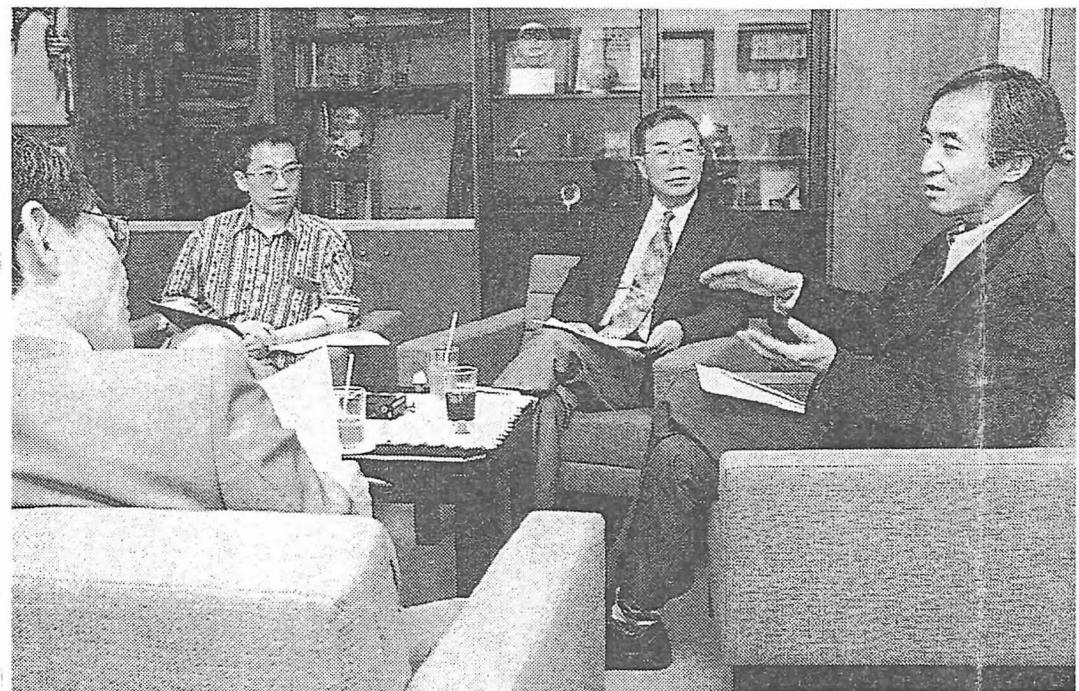
吉岡　成長したのは第3回。橋爪　教団拡張のノウハウ。メディア戦略や自己啓発セミナー的技術で、プロ的テクニックを持った教団だと見ええ。しかも、これまで宗教には「禁じ手」だった、薬物やラッジ監察という手段を使った。これが強引であれば、普通の人が巻き込まれてしまう可能性が大きい。第3回、類似の教団がなかったといつて、「正統な仏教教団」を主張していので、修業や解脱に関心のある人はオウムに接近せざるを得ない。

吉岡　バブルが崩壊し、宣



吉岡 忍氏

幻想を与えたオウム



オウムを生んだ時代背景について語る（右から）吉岡、福島、橋爪の各氏（左端は山室社会部長）

局次長兼社会部長
(五十音順 敬称略)

の教義には、深遠な歴史に満ちた教義があるわけではなく。マイナーはマイナーでいい。「マイナーはマイナーでいいんじゃないのか」という気持ちが若者の中に蔓延している感じがする。

橋爪 オウムの特徴としてまず挙げられるのが思想的な混乱。もう一つは、それでも混乱している中で自己肯定しようとしている点だ。金井闘吉の世代の若者たちが、まず「自己否定」を口にした。自己肯定の場合はそんな手続きは省略だが、歴史觀による分析など必要ないと考へられていて。混乱していく。ただならず自己肯定をすればいい。しかし自己肯定をするべきかと考へて、それが宗教という仕組みになつてゐる。また、自己肯定は選民意識と結び付いていふ——麻原という人物は、なぜ高学歴の優秀な人間に受け入れられたのか。

吉岡 最近のテクノロジーや科学技術の問題で、言つて、現実を知らない、現場を見ない。ナレーターを掛けてくれる他者がいないから、自己中心的になる。しかし一方、多くの研究者や技術者は、専門分野を深めながらも「これでいいのか」「世界の仕組みがいいのか」に自分の研究が当たるまでは、

いや宗教のような情操教育がなく、免疫がないから、理科系の優秀な若者がめり込むことは十分考えられる。それに今の理科系の学問は専門領域が深く狭く、タリffbに分かっていて周りが分からない。精神医学的に言う「離人病」のようになつていて。現実に関心がある人は少しひんكرを下げてもいいから現実とかかわり、やりがいを実感出来ることをしたいと思うのではないか。そこに身の丈に合った教団があり、自分が生かされるとなれば、キャリアを捨てるのも分かる気がする。

混乱する若者誘う

は東大法學部を出たわけでもなく、実力でのし上がった人だ。そこには自負と同時に、コンプレックスも隠されてい る。そこで、官僚を自在に操り、官僚以上の存在になり、それでバランスを取りたいのだ。実力者だったと思う。麻原代 表は、幻聴を提供する専門家。理科系の人間に、ハイクションをうなづつへ、物を作れと指示を出す。そういう組み合わ せになっていたのではない。

終末観と使命感

——省庁制など、国家を模して、いた教団の目的は何だつてのうか。

吉岡 オウムが三ガ道場から始まり、人を集めていったのは八〇年代。社会主義が崩壊し、ベルリンの壁が崩れたなど、世界が大きく動いた。日本にとってその時代は、本來冷戦後の世界をどう考ぐのかという価値観や理念を立ち直す、あるいは作り出す時期に当たっていた。しかし、そういうことをせず、何が価値觀か分がらない消費社会できた。こうした状況の中で麻原代表が示したのが、終末觀からそれを解き明かす教説だった。市民社会を何とか救わなければといふ使命感や、世界はなくなってしまう終末觀から、性急さが生まれ、宗教国家として体裁を整えて世界を救済するというアイデアを作り上げたのではないか。へ

識者座談会



福島 章氏

絶対価値不在の社会

弱者前提の視点を

歴社会主義は強い個人を頑張る個人を前提にして成り立つた。しかし、圧倒的多数が実態としては出でていった。七八〇年代の消費社会では、はみ出した弱い個人をつなぎ止める機能を果たしてしまったが、バブル経済の崩壊以後はそれもできなくなつた。これがいはゆる個人を前提とした新しい社会原理を組み立てることが必要だ。

福島ノーベル賞を受賞した大江健三郎さんの文学のキーワードは「癪」。「癪」が社会の中で力をを持つようにならなければならない。

橋爪 痘いがしかし自立した個人が集まつて自分たちの手で国家を作るというアプロセスを踏み、与えられた民主主義ではなく自分たちが支持しているという感覚があれば、社会への嫌悪や反発はないぶん小さくなる。反社会的な力が少なからずの癪の発生を防ぐ方法は、戻りだがこれしかない。



橋爪大三郎氏

「わいせつも厭がるのか」。この言ひ習わせ

れた疑問が序章だ。それを大脳の生んだ精神機能の介在と社会への表現、という観点から考えようとしたのがこの本だ。

たことは、第二章「性別論」身体的性別論と社会的性別論のうち、後者を「われわれが性別として理解している」ものとして、そもそもなぜ「性別」を認識しながらのか、という提起から始まる。その認識はやはり生殖という文脈のものであり、それが異性愛の位置の裏付けになってしまる。そしてそれならば「性愛」としては、異性愛は同性愛に何ら勝る根拠を持たない、と展開する。

第四章・性愛倫理。初期キリスト教の性愛を、ユダヤ教の律法とイエスの喩という方法論の相違から読み解していく。グーネンス・中世キリスト教・ヨーロッパ・近代道德を経て、現代の性意識まで至る。一九六〇年前後に「性の解放」と呼ばれたものを「性／愛の分解」と呼ぶ。性愛の即物的表現を経て形而上に至るという考察は、現代のもじろう「性」にいたらない形の人間関係や「セクスレス」にもつながるかも知れない。

終章の「フェミニズムに関する言説は、つなげること」があり、物足りないところがありだが、「フェミニズムが登場して以後、特に男性は性や性愛について語るのが難しくなった」という本旨に免じて……。

(木谷妻子)

Human Sexuality | 第6卷第2号通卷19号 (95.6.1発行) pp.113 東山書房